

第18回 日本篆刻家協会役員展 出品目録

会期：令和8年 6月27日(土)～ 8月23日(日)

【前期】6/27～7/23 【後期】7/25～8/23

No.	役職	姓 号	印 文	解 説	出 典	展示期間	
						前期	後期
						6/27-7/23	7/25-8/23
1	常任顧問	イ タニ ゴ ウン 井 谷 五 雲	指鹿爲馬 供爪牙 阿語喧呼 虚名自昇	道理に合わないことを無理に言いくるめる	史記・始皇本紀 自詠詩句	●	
2	常任顧問	ヤマ シタ ホウ テイ 山 下 方 亭	欲造神聖莊嚴之國 博愛	莊嚴の国家の建設を造ろう / 博愛とは人民全てを愛せよと孫文の語	孫文語録	●	
3	会長	オ ザキ ソウ セキ 尾 崎 蒼 石	拳頭望山月 低頭思故郷	こうべ あ 首を挙げて山月を望む / 首を低れて故郷を思う	李白	●	
4	理事長	マ ナベ セイ ア 真 鍋 井 蛙	半日閒	半日の間滝と向きあい世俗のわずらいを遠ざけるという詩の題	陳天刃詩	●	
5	副理事長	キ タ ホウ ユウ 喜 多 芳 邑	映水紅楓 更絶倫 關山路 一片風光慰苦辛 書劔天涯賓	水に映る楓の紅葉 / いっそう比べるものなどない / 峠越えの道 / 一枚の景色が進む辛苦を慰めてくれる / 書物と劔をたずさえ、旅人の私	波澤栄一詩中句	●	
6	副理事長	クロ ダ ギョクシユウ 黒 田 玉 洲	兩岸蘆華 映白鷺 漁翁舉棹 撥煙歸	川の両側の岸に吹く白い蘆華 / 白鷺に映っている / - / -	投子語録	●	
7	副理事長	ショウ ボク ホ 小 朴 圃	地獄非遠 極樂在近 味噌田樂寒冷酒 夜半小船醉客人	地獄は遠くにあらず / 極樂は近くにあり かみひやざけ 味噌田樂寒冷酒 / 夜半の小船 客人を酔はしむ	四方山人 通詩選診解叙 四方山人詩 永久夜泊	●	
8	副理事長	フル ミゾ ユウ ケイ 古 溝 幽 畦	化若風行 民猶草偃	変化すること風行のごとくすれば / 民は草偃のごとく自然と従う	楽府	●	
9	顧問	サカ イ セキ ソウ 酒 居 石 荘	応無所住 而生其心	住する所なくして / 其の心を生ずべし	金剛經	●	
10	顧問	タ ダ リユウエン 多 田 龍 淵	陰晴朝暮 幾回新	朝な夕なな晴れ曇は / いくたびすぎたことか 陰晴朝暮幾回新 已向虚空付此身 出本無心帰亦好 白雲還似望雲人	蘇軾	●	
11	代表理事	クサ ダ スイ エン 草 田 翠 苑	馬耳東風	人の意見や批判を聞かず聞き流すこと	李白詩	●	
12	代表理事	タ ナカ シュウブン 田 中 修 文	秦始皇帝 二世元年詔版 嬴政	古代中国秦国の始皇帝 / 『簠齋藏詔版集成』萩信雄著より 元季、制詔丞相斯去疾、濃 度量、盡始皇帝爲之、皆有刻辭焉、今襲[號]、而刻辭不稱 始皇帝、其於久遠也、如後 嗣爲之者、不稱成功盛德、刻此詔故刻左、使母疑、(元年、丞相の斯・去疾に制詔すらく、法度 量は、 尽く始皇帝之を爲し、皆な 辞を刻する有り焉、今[號]を襲うも、而れども辞を刻して 始皇帝と称せざるは、其れ久遠に 於いてする也、後嗣して之を爲す者の如きは、成功盛 徳を称せず、と、此の詔を刻するに 故に左に刻して、疑う母からしむ、) / 秦始皇帝の本名	史記	●	
13	代表理事	ワタ ナベ ワ キン 渡 邊 和 琴	經句不到 覺春來早	-	陸游詩	●	
14	名譽理事	イ サ ジ ショウウン 伊 佐 治 祥 雲	實際理致 不立一塵 佛事門中 不捨一法	何上の妙理に立てば絶対平等一塵をも認めず、向下の妙用に立てば萬象森羅一物をも除かぬ	-	●	
15	名譽理事	オク ダ アサ ヨ 奥 田 朝 世	我有嘉賓 示我同行	私の元には尊いお客様がお見えになった / 私に正しい道(治国の道)を示してほしい 呦呦鹿鳴 食野之苹 我有嘉賓 鼓瑟吹笙 吹笙鼓簧 承筐是将 人之好我 示我同行	詩經・小雅・鹿鳴	●	
16	名譽理事	コ バヤシ ケイ スイ 小 林 畦 水	翼翼歸鳥 戢羽寒條 晨風清興	翼翼(翅を垂れるかたち) / 戢(おさめる)、寒條(寒木の枝條に憩う) / 晨風(すがすがしい朝の風。風流な楽しみ)(陶淵明の安居の意)	陶淵明	●	
17	名譽理事	ツツミ ハク ユウ 堤 白 遊	春耕夏轉 秋収冬蔵	-	-	●	
18	名譽理事	ヤス ダ ショウセキ 保 田 昌 石	仙家犬吠 露艸鳴蛩	山居の春の状景である / つゆくさにごおろぎがなく(秋庭のこと) 春日鶯啼修竹裏仙家犬吠白雲間 風林落葉秋聲動露艸鳴蛩夜氣涼	杜甫詩 / 吳寛詩	●	
19	常務理事	イ ゴ ガ ドウ 井 後 雅 堂	龍從雲 静観 濁酔 戲墨 彊不息 好古 視於無形 桑蟲食葉	龍は雲を従えることによって勢を増す / 事物の奥に隠された本質的なものを見極めること / 獨り酔う / 墨に戯れる / 努め励み、怠ることがない / 古きを好む / 形のない物を見る / 桑虫葉を食らう	史記・一伯夷伝 王維・訓諸公見過 - / - 易經 / - 礼記 / 宋・張耒	●	
20	常務理事	イシ ハラ ホウ ギョウ 石 原 豊 玉	鳶飛魚躍 招招舟子 籠鷺	万物が自然の本性に従って自由に楽しんでいる様子 / 手招きして舟を呼ぶ舟人の描写 / 王羲之が愛するガチョウを籠に入れ持ち帰ったという故事	詩經 / 詩經 / 晉書	●	
21	常務理事	イズ タ トウ カ 出 田 塘 葭	黒幡三點 閑驅竹馬	黒い(のぼり)幟を合図として三度振ること しず 閑かに竹馬を驅る	李賀詩選	●	

No.	役職	姓 号	印 文	解 説	出 典	展示期間	
						前期	後期
22	常務理事	イナ ガキ カ セン 稲垣 華扇	翠袖歡期 沸地春泥	晴着を着てまた会いましょう / 地を沸かす春のぬかるみ	「好女兒」晏幾道		●
23	常務理事	オオ ムラ セツリョウ 大村 雪陵	竭誠盡敬 巧譬善導	—	—		●
24	常務理事	キタ ダ セイ ライ 北田 成磊	歪歪得正	ゆが 歪みから正しさを得る	俗語		●
25	常務理事	クマ モト セキ セイ 熊本 夕生	雲外一聲雞	雲のかなたより鶏の鳴き声 適與野情愜 千山高復低 好峰隨處改 幽徑獨行迷 霜落熊升樹 林空鹿飲溪 人家在何許 雲外一聲雞	梅堯臣詩「魯山山行」		●
26	常務理事	ゴ トウ コウ タ ロウ 後藤 黄太郎	静黙	静かにして黙っていること	「管子・宙合」		●
27	常務理事	シモ イ ヨウ キン 下井 瑤琴	君子九雅 蒔花 賞雪 候月 撫琴 酌酒 聴雨 品茗 焚香 尋幽	君子九つのたしなみ / 種をまいて育てる / 雪景色を愛でる / 月をながめて心を遊ばせる / 琴をかなで心を和ませる / 酒をくみかわす / 雨音を聞く / お茶を味わう / 香を焚き心を澄ます / 景勝地などをたずねる	—		●
28	常務理事	セキ 関 ショウヒ 関 青飛	茂林脩竹 生死亦大矣 録其所述	生い茂った林とすらりと伸びた竹 / 生きることと死ぬことはやはり重大なこと / その述べたことを書き記す	蘭亭序		●
29	常務理事	ト デ キュウロ 戸出 九廬	聰明叡智 便欲誠意 纔知得是 解釋經義	耳や目がよく利き、物事の理解力と判断力に非常に優れ、深い知恵に富んでいること / 何かを悟ったり道理に気づいた瞬間に「では心は偽りなく整えよう」と即座に向う気持ち / 学問や修養を重ねた末の「腑に落ちる瞬間」を表す / 経典の義理を解き明かす・経文の意味を注釈する	近思録		●
30	常務理事	ナカ バヤシ チ カゲ 中林 千影	雲樓半開 鸞珮相逢	雲樓は半ば開く / 鸞珮は相逢う	李賀「夢天」		●
31	常務理事	ナカ ムラ ヨウシュウ 中村 葉舟	遠望孤蟾(明皎皎) 近聞群鳥(語啾啾)	一輪の月を遠望してみると(皎々と明るく輝いている) / 群れ鳥の囀りに近く耳をすませると(にぎやかに聞える)	寒山		●
32	常務理事	ハセ ガワ キ カイ 長谷川 帰海	眼横鼻直	素直な心 自然の形	禅語		●
33	常務理事	ハセ ガワ タク セキ 長谷川 拓石	懷君 属秋夜 散步詠涼天 山空松子落 幽人応未眠	あなたのことを思っている今は、ちょうど秋の夜である / そぞろ歩きをしながら涼しく広がる天に向かって詩を吟じている / 山の中には人気がなく、松かさがカサリと落ちた / ひっそりと住むあなたも、きっとまだ眠っていないだろう。	韋応物詩 秋夜寄丘二十二員外		●
34	常務理事	ヒガシ オ コウ ガク 東尾 高岳	ほうばなんざん そうばかんか ばじとうふう けんばのよわひ 放馬南山 走馬看花 馬耳東風 犬馬之齒 じゅうが うはくばかく どばじゅうが 十駕 烏白馬角 駑馬十駕	馬字を含む四字熟語	—		●
35	常務理事	マツ モト セイ エン 松本 清苑	白蘋香散 東風起	杳杳煙波隔千里 白蘋香散東風起 日落汀洲一望時 愁情不斷如春水 ようよう えんぱ せんり へだて 杳杳として 煙波 千里を隔て はくひん かおりきん とうふうお 白蘋 香散じて 東風起る ひ お ていしゅう いちぼう とき 日は落つ 汀洲 一望の時 しゅうじょう た ごと 愁情 は断えず 春の水の如し	寇準詩「江南春」		●
36	常務理事	マツ モト マサ シ 松本 雅至	大人虎變 君子豹變 小人革面 卦象(左上) 吉凶(押脚印)右下	だいじん 大人が虎のように美しく変わる。占うまでもなく信頼を得る / 君子は豹のように美しく変わる。「君子豹変」は一般に心変わり、裏切りの意味にとられがちだが、易経の正しい解釈は、君子は誤りがあれば素直にこれを改め、常に自己改革するという意。 / 小人は表面だけ変わったように見せかける。 / 下半分が火、上半分が沢。火と水が激しい勢いで伸びて戦い合う、それが革命。易経では革命というのは天命が改まるという意で、天の意志に従い、人の心に従う行為であるという。 / 占いでいう吉と凶	易経・澤火革		●
37	常務理事	ヨシ エ スイ コウ 吉江 翠光	又何加焉	—	「論語」		●
38	常務理事	ヨシ ダ ガ フウ 吉田 雅風	東方雲海空復空 蕩搖浮世	東の方は雲と海、空虚、どこまでも空虚だ / この世界はたえずゆらゆら動く	蘇軾「海市」		●
39	参事	ア ベ ショウロ 阿部 祥廬	畫中有詩 畫耕夜詩 剛毅木納	繪画の筆墨以外に趣あるをいう / — / —	東坡志林		●
40	参事	サカ モト シュンカ 坂本 舜華	九層之臺 起於累土	九層の台も / 累土より起る	老子		●
41	参事	タ ダ ミノ リ 多田 稔里	春花促鶯 夏日無蟬 秋月照詩 冬風誘好	春の花は鶯の鳴き声を促し / — 秋の月に詩心を照らし出し / —	—		●

No.	役職	姓 号	印 文	解 説	出 典	展示期間	
						前期	後期
42	参事	ホンゴウ シ コウ 本郷 紫香	菩提本非樹	菩提もと樹にあらず (悟を開く法華經の法話)	六祖慧能禪師		●
43	参事	マツ モト スイ ジョ 松本 翠女	こうじつほう き 絳實豊肌	荔枝の赤い皮の下の水々しい果肉	せつとう し れいしをおもう 薛濤詩 憶荔枝		●
44	理事	アサ ノ コウ ガイ 浅野 江涯	魂氣歸于天 形魄歸于地	人の死後、魂は天にもどり / 肉体は、地にもどるものだ	禮記		●
45	理事	アゼ ハラ ショウ カ 畔原 小華	盈城溢郭 雁足黏将 烏頭點著	城に盈ち郭に溢る / 雁の足に黏將して / 烏の頭に點著して	菅原道真詩		● ●
46	理事	イシ カワ ム ガイ 石川 無外	仁義禮智 陶然自樂	—	—		●
47	理事	イシ ドメ シ セン 石留 之然	大觀天地趣 圓覺自然情 任手時揮灑 雲煙筆底生 獨坐聽啼鳥 閑寫水仙花	大觀す 天地の趣 / 円覺す 自然の情 / 手に任せて時に揮灑すれば / 雲煙 筆底より生ず / ひとり ざ して ていてう き かん しゃ すいせん はな 獨り坐して 啼鳥を聴き / 閑に寫す 水仙の花を 横山大観画伯は、その号のごとく、あまねく天地を見渡 し / 自然の情趣を円満に悟り得ている / 心の赴くまま に筆を揮えば / 雲煙が穂先から生じてくる	夏目漱石 「酬横山畫伯惠畫」 横山画伯の画を惠まるるに酬ゆ /「題自画(水仙図)」 みづか 自らの画に題す		●
48	理事	イ バ ショウラン 射場 少藍	龍驤麟振 前無堅敵	威勢のすぐれて盛んなようす / 前に敵はいない	晉書 / —		●
49	理事	イマ ムラ トウ ホ 今村 董圃	難從陸羽毀茶論 細啜襟靈爽 江風吹雨 暗衡門 手碾新茶 破睡昏	したが がた りくう きちやろん こま すす きんれいさわ 従い難し陸羽の毀茶論 / 細やかに啜れば襟靈爽やかに / こうふう あめ ふ いて こうもんくら て しんちや ひ すいこん 江風 雨を吹いて衡門暗く / 手づから新茶を碾きて睡昏 を破る 宋時代の陸游「茶」を読んだ詩句を取り上げ刻した。	陸游 (試茶) (北巖采茶用忘懷録中法煎飲) (飯罷碾茶戲書)		●
50	理事	ウラ オカ コウ ノ 浦岡 香之	雅人深致 遊嬉燕樂 晨風清興 富貴安樂 能成器長 承前啓後	— / 遊んで楽しむこと / — / — / — / —	俗言		●
51	理事	エンドウ ベイ シ ジン 遠藤 米子人	黙而識之 誨人不倦 何有於我哉	黙って心に刻んで記憶し / 人に教えて倦むこともない / これ以外、私に何があるだろうか	論語		●
52	理事	オオ タ ケイ スイ 大田 桂翠	千里鶯啼 緑映紅	春が千里に満ちて鶯が啼いている / 緑の若葉が赤い花に映っている	杜牧「江南春」		●
53	理事	オカ ザキ ギ セキ 岡崎 戯石	水流天自在心遠地寛閑 舉世無知心自得衆人皆醉我何醒 靜中觀物化 四海兄弟	水は流れ心はのびのびとして天地はのどかでしずかだ / 世人は誰1人としてわれを知る者もないがわが心は自得 し衆人皆酔う時にはわれ1人正気になるまでもない。世 に随ってまた酔うべきだ / 静境中に物の変化をみる / 真心と礼儀を尽くして他者に交われば世界中の人々はみ な兄弟のように仲良くなること	—		●
54	理事	オ ガミ ギョクカン 小上 玉菡	翠簾斜捲	美しい緑色(翡翠)の簾が斜めに巻き上げられ 楊柳楊柳 裊裊隨風急 西樓美人春夢中 翠簾斜捲千條入	夷陵女子		●
55	理事	オ ガワ ヒ セキ 小川 匪石	三重書道教育協会印 熟知茅齋絶 低小江上燕子故 来頻銜泥點 汗琴書内更 接飛蟲打著人 三重県書道連盟之印	— / 杜甫「絶句漫興」九首其三 (興にふれてと作った絶句。上元2年春浣花の草堂にあつ ての作) やって来たツバメが随分成長したようだ。部屋を汚して いく様子を腹立たしく思うことは全くないのだ。 /—	— 杜甫「絶句漫興」九首其三 —		●
56	理事	カナ イ リュウカ 金井 榴華	淥水浄素月 月明白鷺飛	澄んだ水に白い月が洗われて映え/ 明るい月光の中を白鷺が舞う	李白詩		●
57	理事	キシ ムラ ソウ フウ 岸村 爽風	笑而不答 心自閑 桃花流水窅然去 別有天地非人間	笑って答えなかった / 心は自ずと閑か(平静)である / 桃 の花が川面に散って、はるか彼方に流れ行く / 俗世間 とは違う別世界がここにはある	李白「山中問答」		●
58	理事	キ ムラ ヨウ ヨウ 木村 容庸	大慈大悲 抜苦與樂	慈悲の形相 / 衆生から苦しみを抜きとり樂を与えること	仏教の教え		●
59	理事	サエ グサ リュウセン 三枝 龍泉	雷轟霆震 象繞龍圍 山臨海赴	雷鳴が激しく轟き大気が震動する様 / 数多くの象が龍を取り囲んでいる様 / 山に臨み海に赴く いずれも人間の力がおよばない人知を超えた力を目前に した様を表わす	新編鎌倉志 卷之三		● ●

No.	役職	姓 号	印 文	解 説	出 典	展示期間	
						前期	後期
						6/27-7/23	7/25-8/23
60	理事	サ ガ ラク ザン 嵯 峨 洛 山	會者定離 象山日利 象山華甲以後 三樂齋 牧浩大利 號象山 象山華甲以後 鑄山煮海 象山華甲以後 象山	—	—	●	
61	理事	シン オウ 晋 鷗	長相思 春華秋實 秋堂 月明華屋 五湖草堂 如魚得水 半俗半禪半隨緣	—	—	●	●
62	理事	タケ ダ レイ シュウ 武 田 黎 秀	萬壽 平安 和八年五平安 安心無為 可久長 富貴	—	—	●	
63	理事	タツミ ショウセキ 翼 聖 石	感應神速 寧耐成事 條理明整	—	—	●	
64	理事	タ ハラ ゴ ザン 田 原 呉 山	無上甚深微妙法 百千萬劫難遭遇 我今見聞得受持 願解如來真實義	我いま遇い難き無上深秘の經典を拝読することを得たり。願わくば如來の真實義を体得に、悟りへの道を進まん。	開經偈		●
65	理事	テラ ダ チ リョウ 寺 田 知 了	故説般若波羅蜜多呪 行深般若波羅蜜多時 遠離顛到夢想 色不異空 空不異色 是大神呪 是大明呪 真實不虛	苦しみを取り除く真實の智慧を伝えるため真言を唱える / 深い智慧の修行を完成させた時 / 真實とは逆の誤った見方や妄想・執着から離れなさい / 物質は固定的な実体がないことと違わない / 実体のない状態は物質・現象・現実と違わない / この上ない靈力を持った偉大なる言葉をとなえる / 悟りの智慧 / 真實であり決して虚妄でないこと	般若心經		●
66	理事	テラ ダ トウ ウン 寺 田 濤 雲	雲樓半開 鸞佩相逢	—	李賀詩		●
67	理事	ナカ モト カン ジョウ 中 本 管 城	吉人之辭寡 躁人之辭多	有徳者はことば少なく、徳のない者は多言である	易經		●
68	理事	ナ グラ カツ ヒコ 名 倉 克 彦	從吾所好 朝歌夜絃 石瘦崖枯	遠慮気がねせず自分の好むとおりに行く / 朝な夕なに絃歌をたのしむ / 溪流の石はつやを失い崖の樹々は枯れる(冬の形容)	論語 / 杜牧 / 菜根譚		●
69	理事	ニワ タ ロ シュウ 庭 田 露 舟	月下相逢 林逋仙去 春盡行人(未到家) 今日滿溪俱是花	観梅 月の下でたがいに合う / 林逋は中国詩人錢塘をさす、仙去は仙人の事をさす(詩人錢塘は生涯、仙人として過した) はるつ 春尽く 春が尽きてしまうのに旅人はまだ家に帰ってこない / 今日谷川は散り敷いた花びらでいっぱいだった	梅花百詠 / 北宋 鄭獬	●	●
70	理事	ハタ マ セイ ロ 畑 間 青 露	鑿勒馬鞞 廓遼宣搏	鑿勒馬鞞 / 廓の原は宣搏なり	石鼓文 田車鼓 / 鑿車鼓		●
71	理事	ハナ フサ コウ ケイ 花 房 浩 佳	臨行密密縫 報得三春暉	行(出発)に臨んで密密に縫ふ / 三春(母の恩恵・愛)の暉に報い得んと	孟郊「遊子吟」		●
72	理事	ハヤ カワ チョウファン 早 川 聰 芬	二十五絃 彈夜月	瀟湘何事等間回 水碧沙明兩岸苔 二十五絃彈夜月 不勝清怨卻飛來	錢起詩「歸雁」		●
73	理事	バン セイ ホ 坂 正 歩	白日動 滄溟開	太陽が揺れ動く / 大海が二つに切り開く 豫章翻風白日動 鯨魚跋浪滄溟開 且脱劍佩休徘徊 西得諸侯棹錦水	杜甫詩「短歌行 贈王郎司直」		●
74	理事	フク タニ カ コウ 福 谷 華 紅	郷思 不繫舟 櫂聲齊唱	故郷をしたうこと / 船頭もなく、ただ水面に浮いている舟(運命にまかせた姿) / 漕ぎ手たちの威勢のいい掛け聲 がびきんか みずあぶら ごと あわれ わ こころ つな ふね おな 峨嵋山下 水油の如し 憐む 我が心の繫がざる舟に同じきを。何れの日か 片帆 錦浦を離れ 櫂聲 齊唱して 中流を發せん。	薛濤詩		●
75	理事	フル セ ショウセキ 古 瀬 章 石	上善若水 公孫布被 驕者滅 邦無道	最上の善は水のようなものである / 高い地位があるが質素な生活をする / 驕る者は滅びる / 道德の行われない国	「老子」八章 「史記」平津公伝 「十八史略」宣帝「論語」		●
76	理事	フル ノ エン アン 古 野 燕 安	師資之道相親父子 虚空尽衆生尽涅槃尽我願尽 心洗香體恭華 谷不惜響 明星来影	真實を伝える師とそれを受け継ぐ弟子はいわば世にそれを証して人々のために働いていく同志。肉親よりも深いきずなである。 / 全てのいのちあるものへの報恩のわが願い。それは大空があり、いのちがあるものがあり、永遠なる涅槃がある限り、決して尽きぬように。 / - / - / -	空海の言葉		●
77	理事	マ ケイ セン 馬 景 泉	山静日長 事雖小不為不成 放情兵壑 一念通天 丙午 回天再造 徳不孤必有鄰 馬景泉印 子孫長久 千里同好 表裏如一 義貫金石 耕石道人 剛健中正 非寧静無以至遠 實至名歸 一道通 牡丹	—	—	●	●

No.	役職	姓 号	印 文	解 説	出 典	展示期間	
						前期	後期
78	理事	マツ モト ソウ フウ 松本 艸風	花看半開 酒飲微醺	花は半分開いたときに見るがよい / 酒はほろ酔いかげんに飲むが楽しい	菜根譚		●
79	理事	ヤス イ ホウ セン 安井 芳泉	崔九堂前 江南好風景 落花時節 又逢君	若いころ岐王の屋敷であなたをよく見かけ、崔九の家でも何度もその歌声を聞いた。 / 今まさに江南は美しい景色の中だが、花が散るこの時節にまたあなたと再会した。 岐王宅里尋常見崔九堂前幾度聞 正是江南好風景落花時節又逢君	全唐詩		●
80	理事	ヤマ モト ジュ ホウ 山本 寿法	皆佛事作 牆壁瓦礫 発菩提心	—	修証義		●
81	理事	ヨコ イ セイ レン 横井 青蓮	泥融飛燕子 沙暖睡鴛鴦	泥は春の日差して融け燕は飛び回る / 暖かな砂浜で鴛鴦が睡っている	杜甫詩 絶句其の一 中の句		●
82	参与	アオ キ ユウ ザン 青木 雄山	慎終追遠 民徳歸厚	終わりを慎み遠きを追えば / 民の徳、厚きに帰す	論語 学而第1		●
83	参与	アキ ヤマ ショウ カ 秋山 捷華	願言不獲 抱恨如何	ねが われい 願いて言獲ず / 恨を抱きて如何せん	陶潜詩 停雲其四		●
84	参与	コ マツ ゴ ガク 小松 五岳	牀前明月光 疑是地上霜 拳頭望明月 低頭思故郷 誰家玉笛暗飛 声散入春風 滿洛城此夜 曲中間折柳何 人不起故園情	静夜思(静夜に思う) しょうぜん げつこう あき うたご ちじょう しも (床前 月光 明らかなり 疑うらくは 地上の霜かと こぶ あ めいげつ のぞ こうべ た こきょう おも) 頭を挙げて 明月を 望み 頭を低れて 故郷を 思う) 春夜洛城聞笛(春夜 洛城に笛を聞く) た いえ ぎょくてき やみ こえ と (誰が家の玉笛か 暗に声を飛ばす さん しゅんぷう い らくじょう み 散じて 春風に入りて 洛城に満つ こ よ きよくちゆう せつりゆう き 此の夜 曲中 折柳を聞く なんびと こえん じょう おこ 何人か 故園の 情を起さざらん)	李白		●
85	参与	タ ダ ガク ユウ 多田 学友	永和九年 歳在癸丑 脩楔事也 一觴一詠 遊目騁懷 亦将有感於斯文	中国353年東晋時代王羲之ら蘭亭で禊会(みそぎの会)の年 / 癸丑の歳である / 禊(みそぎ)を行なうこと / 一杯の酒に一首の詩のこと / 広大な宇宙を仰ぎ見、盛んな万物を見おろし気ままに眺め思いを馳せ、充分に目と耳のたのしみをつくすのは実に楽しいこと。 / 世が異なり事が変わっても、思いを発する理由は同じで、後世の見る人も、この文章に心を動かさそうとすること。	蘭亭叙		●
86	参与	ツ ダ シュウホウ 津田 秀鳳	久爲簪組纍 曉耕夜榜	長い宮使いのわずわしさ / 朝耕し、夜サオさす	柳宗元「溪居」		●
87	参与	フル タ マモル 古田 衛	銀漢無聲 轉玉盤	天の川は音もなく静まり返り / 宝石のような月(玉盤)がゆっくり移動している	蘇東坡「中秋月」		●
88	評議員	オオ ノ ショウザン 大野 勝山	華壓樓臺 深蔵若虚	花はいまを盛りと高殿をおしつむように咲いている / 奥深くかくして何も無いように見せる。君子は徳を表に見せない。	明・王禕「王忠文公集」 「史記」老莊申韓伝		●
89	評議員	カネ コ セイ ハ 金子 静巴	南浦送君 遼海月明 陰山風動	南浦に君を送る / 遼海、月明らか / 陰山、風に動く	国朝詩別裁集		●
特	特別展観	バイ ジョ テキ 梅 舒適	大方無隅 老而彌篤	—			●